

# ろう児はどのように文字習得をするか

How do profoundly deaf children learn to read?

伊藤 泰子†

Yasuko ITO

**Abstract** We know that children who were born profoundly deaf have much difficulty to learn to speak English or Japanese. But is it possible that profoundly deaf children learn to read written English or Japanese? Some researchers mention that early exposure to fingerspelling actually helps deaf children become better readers. Then I tried to find the reason why fingerspelling helps deaf children develop their reading ability and examined how to develop deaf children's reading ability with fingerspelling. I concluded that fingerspelling is not an alphabet spelling but a sort of sign language for deaf children and they can master fingerspelled expressions as their native language which means a naturally effortlessly acquired language.

## 1. はじめに

本論ではろう児(profoundly deaf children)がどのように文字を習得して読み書きできるようになるかを論じる論文資料を検証して、なぜ、ろう児が文字を習得できるのかを考えてみた。耳が聞こえる子どもは文字が読めるようになる前に、シャワーのごとく降り注ぐ大量の音声言語(英語や日本語など)を聞いて、さまざまな言い方・表現を聞き覚える。しかし、ろう児にはそのような聞き覚える体験はないので、聞こえる子どもが文字習得時期に聞き覚えた言い方・表現を文字に変換すると同様なことは不可能となる。ところが、ろう児が文字を習得して英語や日本語の文章を読み書きできるとしたら、どのようにできるようになるのかが疑問となる。

そこで本論では、ろう児・文字・手話とは何かをあらためて考えて定義付けをした。次に、ろう児についての問題は何かを考えると、ろう児がコミュニケーションが困難であることであった。それでは、どのようにしたらコミュニケーションがうまくできるようになるのだろうか。ところで、ろう児がコミュニケーションする相手には、聞こえない人と聞こえる人がいるが、聞こえる人とは文字でコミュニケーションできるのではないかと考えられる。しかし、文字でコミュニケーションするために、ろう児は文字を習得できるのか、もし、可能であるとしてもどのようにしたら文字を習得できるのだろうか。

† 愛知工業大学 基礎教育センター  
非常勤講師

文字習得のプロセスを知りたいと思い、多くの論文資料を検索したところ、いくつかの論文資料には、ASL(アメリカ手話)を第一言語とするろう児は文字習得率が高いことが示されていた。しかし、手話のうまいろう児が文字を習得できる理由については議論されていなかった。そこで、筆者は、ろう児が文字を習得できる条件を見だし、仮説とした。

## 2. ろう児・文字・手話

本論では「ろう児」は後天的ではなく、生まれつきの「ろう児」を意味することにする。「ろう(profoundly deaf)」とはほとんどの音を聞き取ることができない程度を示す。ろう児は耳を使わない。情報を聞き取ることができないが、耳を補完する目の機能は優れていて、情報は目で見て得ることが中心となる。ろう児は耳以外の利用可能な目を中心に使って情報を得る。

斉藤<sup>1)</sup>はろう者が高度な視覚認知・記憶能力を持っている。さらに、このすぐれた視覚認知・記憶能力は手話を獲得することによって開発される能力であって、聞こえないというだけでは十分に開発されないと述べている。

聞こえる子どもは音声言語の体系を聞き覚えることで習得する。その自然に身に付いた言語が第一言語である。そして、文字は音声言語の体系を持つ。ほとんどは音声言語(たとえば、英語や日本語)の音をそのまま、文字に変換したものが文字である。たとえば、日本語の

音声言語をそのまま、文字にするとひらがなの五十音になる。英語では英語の音声言語を発音通りではないが、ほぼ、そのまま文字にしたものがアルファベット 26 文字である。

一方、手話は音声言語の体系とは異なる。そのために、手話から文字に変換することは大変難しいことだと想像される。まず、音声言語の体系を学んで文字を習得するとなると、大変な時間と努力を必要とするのではないかと考えられる。

その現状について、山下・谷本・川合<sup>2)</sup>は聴覚障害幼児が日本語を習得することに苦勞するので、なるべく早期から文字導入を行わなければならないと考え、手話や指文字を使用するようになったと、2003 年度の調査結果から述べている。しかし、どのような指導をするかは確立されていないと加えている。

さて、ろう児の文字の習得について考える前に、耳が聞こえる子どもの文字の習得法を確認しておく。聞こえる子どもは音声言語を身につけるときに、多くの表現を聞き覚える。音声言語が聞こえる子どものライブなコミュニケーション手段となる。ライブ・コミュニケーションができる、自然にあまり苦勞しないで「聞き覚え」の繰り返しによって習得する音声言語が、聞こえる子どもの第一言語となる。聞き覚えた音声はその場では「消える」が「姿が見えなくなっている」だけで頭の中に残って蓄積される。その後、文字を覚える時期になると、聞き覚えた音声の言い回し・表現を思い出して、その音声を手がかりに聞こえる子どもは文字習得する。このようなプロセスで文字習得をするのではないかと筆者自身の文字習得の経験を思い出して考えてみた。

ところで、手話には大きく分けて 2 種類ある。ろう者自身から自然発生的に生まれたろう者の手話と音声言語対応手話がある。ろう者の手話は、たとえば、アメリカ手話 (American Sign Language) や日本手話と呼ばれる。音声言語対応手話は英語対応手話 (Manually Coded English) や日本語対応手話と呼ばれる。2 種類の手話の大きな違いは、音声言語対応手話は手話をやりながら音声を出したり、音声を出さなくても口の形を付け加えたりする。しかし、ろう者の手話は音声言語とは異なるので、口の形を付け加えることはない。

さらにろう者はアメリカ手話や日本手話だけでなく、*fingerspelling* (英語のアルファベット 26 文字を表す手指の形)、日本語では指文字 (五十音を表す手指の形と、たとえば、「じーぶ」のように、「じ」濁音・「ー」音をのぼす・「ぶ」破裂音の 3 つの手指の形) を利用する。以下、*fingerspelling* は指文字と表示することにする。

まとめると、ろう児は耳以外の利用可能な手段で情報を受信し、発信することができるが、文字習得は聞こえる子どもと同じようにはできないはずである。ろう児はろう者の手話、音声言語対応手話、指文字を習得して利

用できる。

### 3. ろう児が生まれたら親はどうするか。

想像してみてください。ろう児が生まれたら親はどうするでしょうか。聞こえないと何が困るか、親は想像するはずである。親が問題とする点はコミュニケーションである。将来、我が子が周囲の人とのコミュニケーションがなかなかうまくいかず、社会で自立して共に生きていけないのではないかと不安になる。

それでは、親はどうしようとするか。コミュニケーションがうまくいかないという問題を解決するためには、ひとつには少しでも聞こえるようになることであろう。そのために補聴器や人工内耳を装着することもろう児に勧めるであろう。

もうひとつの問題解決法は音声ではなく、文字でコミュニケーションすることを考えるのではないか。音声はダメなら文字でコミュニケーションできるはずだと考えられるが、コミュニケーション手段となる文字を十分習得できるだろうかと不安が残る。

まず、一つめの補聴器や人工内耳によって聞こえる人になれるように考えるかもしれないが、現在においては完璧に聞こえる人になれるわけではない。ろう者が難聴者になる程度にすぎない。補聴器や人工内耳は眼鏡やコンタクトレンズとは異なり、「聞こえる人」にするものではない。

このように、ろう児が聞こえる人になれない、文字を習得することが難しい状況にあれば、ろう児は聞こえないことが原因となる劣等感や、他の子どもと文字でもコミュニケーションがうまくできないために仲間に入りにくいことから生まれる孤独感を感じるであろう。彼らは聞こえる人の社会で、コミュニケーションするために、いつもサポート (手話通訳者や手書き・パソコン要約筆記者) を必要とすることに申し訳なく感じるかもしれない。

しかし、ろう児がサポートなしでコミュニケーションすることができれば彼らは劣等感も孤独感も感じることはないと言える。

### 4. ろう児はコミュニケーションできるようになるか

ろう児がコミュニケーションする相手には「聞こえない人 (ろう者)」と「聞こえる人」がいる。ろう児が手話を第一言語として習得すれば、ろう者とは手話で自由自在にライブコミュニケーションができる。では、聞こえる人とは手話でライブコミュニケーションできない場合、文字でコミュニケーションできるようになればよいと考えられるので、手話から文字への変換がうまくできるような方法を考えたい。

図1にまとめたが、人間のコミュニケーション手段を分類すると、ほぼ世界中の誰にでも伝えあえるジェスチャーに類似する、体全体を利用する身振り言語があって、そこから枝分かれして、視覚を中心に利用する手話言語と聴覚を中心に利用する音声言語があると筆者は考える。手話は目を使う「視覚言語」、一方、音声言語は耳を使う「聴覚言語」と分類できるであろう。となると、文字は手話側から見れば視覚を利用する「視覚言語」となるが、音声言語側から見れば、声を出して読み上げる「聴覚言語」の性質もあるといえる。つまり、文字は手話と音声言語の間に配置されるであろう。

身振り言語		
視覚言語		聴覚言語
手話	文字	音声

図1 言語の分類

コミュニケーション手段としての第一言語は聞こえる人にとっては音声言語であり、母語とも呼ばれる親から子どもへ継承される言語である。第一言語(母語)はいつのまにか、聞き覚えて習得した言語である。では、ろう児の第一言語は何か。ろう児にとって、文字はいつのまにか自然に習得できるような言語ではないので、文字は第一言語ではない。ろう児の第一言語は、ろう者コミュニティの環境の中でいつのまにか「見覚えて」習得する手話である。

ろう児は聞こえない人とのコミュニケーションは手話でできる。ろう児の大半の親は聞こえる人なので、手話は親から継承されることはない。手話がある環境のろう者コミュニティで手話はろう児に継承されなければならない。ろう児はそのろう者コミュニティで、ろう者同士、手話で自由自在にコミュニケーションができるようになる。

では、聞こえる人とのコミュニケーションは、ろう児が聞こえる人の社会で自立して生活するために必要なので、文字でのコミュニケーションができるようになればよいと考えられる。文字はろう児にとって第一言語ではないので、文字習得にはかなりの努力が必要となると見られる。しかし、本当に手話を第一言語とするろう児は文字習得がむずかしいのか。

ところが、アメリカ手話を基にして文字習得が可能であることを述べる論文がいくつか書かれていた。

## 5. 手話が第一言語であるろう児は文字習得率が高い

第一言語のアメリカ手話を基にすると英語の文字習得がうまくいくと考えられている。

Azbel<sup>3)</sup>は、ろう児は音声を知らないで文字習得をしていることを実験結果から見いだした。さらに、手話を

使うろう児は文字と手話を関連づけて文字習得をしているという主張を Azbel の実験結果が裏付けている。

Despite their limitations, many deaf people master reading without knowing sound. .... Some researchers argue that deaf children who are experienced with sign language learn to read by associating printed words with their corresponding signs(Andrews & Mason, 1986; Maxwell, 1984).(p.5)

つまり、アルファベット 26 文字の発音の仕方・読み方は、音を持たない絵のようなもので、ろう児にとって全く音を意味しないものであったと筆者は考える。ろう者は手話が似ている単語 (vote と tea は両方とも、片手の 5 本の指を曲げて輪を形作って投票箱の口・コップを表して、もう片方の手は親指と中指でつまんで投票用紙を入れる様子・コップをスプーンでかき混ぜる様子) はまちがえやすかったが、発音が似ている単語はまちがえることはなかったという他の研究者の実験結果も引用して、ろう児にとってアルファベット 26 文字の音声は不必要であることを強く主張している。

For instance, Klima and Bellugi(1979) found that the deaf have difficulty differentiating between written sentences containing dissimilar words whose signed versions are formationally similar, such as “vote” and “tea”.(p.5)

Mayberry<sup>4)</sup>も、高いアメリカ手話能力をもつろう者は文字習得能力が高いと述べる。

These results show that highly developed sign language skill is related to high levels of reading achievement in deaf individuals for whom sign language is a primary means of communication. Spoken language is not the only path to literacy development.

どのように手話から文字を習得するかについて、chaining (アメリカ手話と指文字の両方で何度も繰り返して単語や文などをろう児に提示する教育方法) で指導すると述べている。しかし、最終的にはその手話から文字を習得する方法についてはあまりよく分かっていないと言っている。

Humphries & MacDougall<sup>5)</sup>はろう学校のろう者の教師は聴者の教師より、かなり多く繰り返し、授業中に指文字を使うことを調査結果としてあげている。実験結果のデータをひとつ、とりあげると、90 分間の授業中にろう者の教師は 268 回、聴者の教師は 123 回、指文字を使っている。ろう児に指文字でアルファベットを大量に提示していることになる。

Padden<sup>6)</sup>は、ろう児は指文字を最初は手話として身につけ、次にアルファベットのスペルの文字として学習すると述べる。論文のタイトル (“Learning to Fingerspell Twice: Young Signing Children’s Acquisition of Fingerspelling”)にも示されているように、幼いときから指文字を見て覚えたろう児は、聞こえる子どもが文字を覚える時期になると、指文字を再び利用して、文字を覚えるということである。

The child might be able to understand the fingerspelled word in a signed sentence, but the skill of writing it down in English is related to reading ability.(p.198)

手話で授業をする Gallaudet 大学の Baker<sup>7)</sup>は、指文字は文字習得には重要であり、指文字をろう児が自然に身につけるものであることを理解することが重要だと述べる。言い換えると、一般的には指文字を自然にろう児が身につけるとは理解しにくいということになる。

To understand the role of fingerspelling in language acquisition and later literacy, it is important to understand how fingerspelling is naturally acquired by deaf and hard of hearing children with deaf families.(p.2)

幼いろう児は指文字で示した単語をひとまとめの手話として受け入れて脳に蓄積させる。

Young deaf children do not pay attention to the execution of each individual handshape in the given fingerspelled word. Instead they perceive fingerspelled words as whole units or signs. (p.2)

指文字とアメリカ手話が、ろう児に同時に提示されて、指文字が語彙を増やすと述べている。

Typically fingerspelling and American Sign Language acquisition occurs simultaneously. (p.5) A unique feature of American Sign Language is how fingerspelling expands the lexicon.(p.6)

deaf family ではろう児が自然に指文字を獲得することを理解することが重要だと主張している。そして、ろう児は聞こえる子どもが音声言語を身につけると同様に指文字とアメリカ手話を身につけていると述べている。

Deaf families fingerspell to their children when they are very young. Early exposure to fingerspelling helps

these children become better readers. Fingerspelling facilitates English vocabulary growth, and larger the lexicon, the faster new vocabulary is learned.(p.1)

To understand the role of fingerspelling in language acquisition and later literacy, it is important to understand how fingerspelling is naturally acquired by deaf and hard of hearing children with deaf families.

This early visual language development in deaf children is similar to early spoken language development in hearing children. (p.2)

以上の論文資料から指文字が文字習得に役立っていることはわかるが、どのように文字習得に指文字がつながるかはどこにも述べられていなかった。

## 6. 仮説：どのように、アメリカ手話を第一言語とするろう児が文字を習得するか

どのように、指文字が文字習得につながるか、なぜ、指文字は文字習得につながるかを考えてみることにする。

まず、指文字には2面性があると筆者は考える。図2に示すように、音声から見ると文字だが、手話側から見れば「音声を加えない」なら文字の裏の顔は指文字、言い換えると、それは手指の形で表す手話と見なされる。

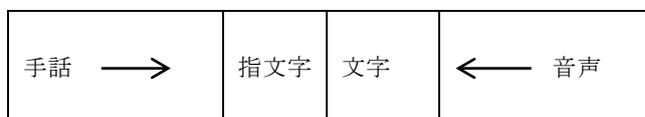


図2 指文字の2面性

手話と見なされる指文字は、第一言語の手話と分類され、ろう児は指文字を「見覚え」で自然に身に付ける。何度も「見覚え」で、頭の中に蓄積される。その場ではその指文字は消えたように思われるが、いつでも手指の形で再生されることができる。聞こえる子どもが音声言語を「聞き覚える」と同じことを、ろう児は音声言語のスペルを指文字という音声言語の手話版（たとえば、音声言語の文字の裏の顔）で「見覚える」のだろうと筆者は考える。

その後、聞こえる子どもが文字を習得すると同じ時期に、ろう児は指文字26個がアルファベット26文字に対応していることを教えられて、指文字から文字に変換する訓練を与えられる。この変換は指文字を文字として見なすことになる。

しかし、指文字が手話として幼い時に、繰り返し提示される環境の中で何度もたくさんの指文字を見て覚えたろう児が文法などの言語体系が異なる音声言語の文字を、聞こえる子供と同じ程度の努力で習得できるだろうかとさらに疑問を持つ。

言語体系が異なることが二つの言語を同時に習得することにどれほどの影響を与えるのか。影響をあまり与えない場合は、バイリンガルの子どもになるであろう。ろう児がアメリカ手話と英語のスペルを表す指文字の二つの言語を使うバイリンガルになる場合、言語体系の違いがマイナスの大きな影響を与える以上にプラスとなる大きな影響要因があるはずである。

聞こえる子どもが英語と日本語のバイリンガルの子どもになる場合とアメリカ手話と英語の文字のバイリンガルの子どもになる場合を考えてみよう。

A 言語	⇔	媒体(共通点)	⇔	B 言語
英語	⇔	音声	⇔	日本語
英語の指文字	⇔	指、手	⇔	アメリカ手話

図3 言語間の接続媒体

図3のA言語とB言語は言語体系が異なるが、共通点がある。この共通点を媒体として変換する(=翻訳する)ことが可能と言える。聞こえる子どもの場合は音声、ろう児は指・手を使う手話が媒体となる。言語体系の違いを問題とさせない強力な接続媒体があれば、バイリンガルになると考えられるのではないか。さらに言えば、森田<sup>8)</sup>が「二つの言語を接続するものは、それぞれの言語の形ではなく、観念なのだ」と表現しているように、共通点は言語が核として持つ「伝えるべき内容」ということではないか。

ただし、英語・日本語バイリンガルを育てるためには、音声のみで、英語指文字・アメリカ手話バイリンガルを育てるためには手指のみで、A言語とB言語を自然に繰り返すことで覚えることができる、第一言語習得時期に両言語を環境言語として与えることが条件となるであろう。幼い時から子どもに言語を教えて覚えさせるのではなく、言語を子どもが覚えたいと思って、何度もまねをして身につける環境を生まれた時から与えることで、子ども自身の学ぶ力でバイリンガルになると考えるべきではないだろうか。

実際に、コーダ(CODA: Children Of Deaf Adult 聞こえない親をもつ聞こえる子どもたち)と呼ばれる聞こえる人は、家庭での親とのコミュニケーションは手話であるが、そのほかの場面は英語の環境に生きる。彼らは手話と英語を **native language** として持つ、生まれつきのバイリンガルとなった。

## 7. まとめ

ろう児が生まれたとき、聞こえないことを問題として聴覚障害児と見なし、できるだけ聞こえるようにしようとする考え方と、聞こえないから言葉が話せないので、聞こえる人とコミュニケーションができないことを問題

として、コミュニケーションができるようにと考える考え方がある。

聞こえないことを問題とする考え方の裏には、森田<sup>9)</sup>が言うように「かつて、音声言語だけが真の言語でありそれゆえ聾者は言語を持たない存在である、と考えられていた時には、聾者に対して、彼らに欠落している音声言語を与えることだけが問題であった」とする、口話法につながる音声言語中心主義の考え方があるとも言えるだろう。一方、コミュニケーションができないことを問題とする考え方の裏には、森田<sup>10)</sup>が述べるように音声言語と手話は異なる言語と見なすことで、どのように手話から音声言語の文字を習得できるのかが疑問となった。

「聾者の言語も聴者の言語もひとつとされたから、二つの言語の間をつなぐ努力はそもそも問題にはならなかったのである。聾者の母語としての手話が発見されてはじめて、この問題は浮上する。それは、二言語使用者としての聾者の発見、あるいは創造をも意味したのである。」

ろう児は幼いころからアメリカ手話と指文字を見おぼえて習得すると、聞こえる子どもが文字を覚えると同じ時期に、ろう児は指文字をアルファベットに変換して英文を見て文章の内容を理解するようになる。手話で本の文章を表して「本読み」をすることで、文章を解釈することができるようになることは、文字を習得することになる。以上のプロセスで、ろう児は文字習得をすると筆者は結論づけた。

指文字は声を付け加えなければ(口の形を付け加えなければ)手指を使う手話の一種であるので、ろう児は第一言語の手話を環境の中で与えられれば、**native language** として身につけることができるからであると筆者は考えた。第一言語の手話(指文字)が音声言語の文字となる。手話はライブコミュニケーション手段、生きるための言語であり、文字は聞こえる人の社会で生活するための言語となる。

聞こえない子どもが生まれたら親はどうするかと質問されたら、筆者は手話と指文字を使うコミュニケーションの環境を、まず第一につくるべきだと答える。そんな環境の中で育つろう児は、文字にも興味関心を抱き、自らたくさんの本を見て手話で解釈するようになって、文章を読む力は読むことで獲得していくであろう。それは聞こえる人の社会への積極的参加につながり、彼らの劣等感や孤独感を消すことになるであろう。

## 8. あとがき

コミュニケーションしたい欲望があれば、人間は自分の利用できる手段でコミュニケーションする能力を誰もがもっている。ろう児はまず、手話を身につけることで、

コミュニケーションできる自立した大人になれる。人間には「生きる力」が備わっている。ろう児が生まれた時、親がろう児の根源にある問題を理解しなければ聴力以外で人間の備えもつ力をろう児が発揮するように育てることを、自信を持って選択することはできない。現代の情報が満ち溢れた社会の中で、親が科学の力で「聞こえない」という欠陥をできるだけ、正常に近づけることを優先的に選択する可能性が高いが、誰もが自分側（＝聞こえる人側）からの見方でものごとを見ているために、聞こえないことを欠陥とみなしている点に気づかなければならない。

#### 参考文献

- 1) 斉藤くるみ：少数言語としての手話， p.14， 東京大学出版会， 2007.
- 2) 山下睦子・谷本忠明・川合紀宗：聴覚障害幼児に対する文字の指導に関する研究（2）， 障害児教育実践センター紀要， 第5・6号， 25-32， 2008.
- 3) Azbel, Lyuba. “How do the deaf read?”, Midwood High School, Brooklyn, NY., 2004.
- 4) Mayberry, Rachel. “Cognitive development in deaf children: the interface of language and perception in neuropsychology,” Handbook of Neuropsychology, 2<sup>nd</sup> Edition, Vol.8, Part II, p.74, 2002.
- 5) Humphries, T & MacDougall, F. “Chainig and other links: Making connections between American Sign Language and English in two types of school settings,” Visual Anthropology Review, 15, pp.84-94, 1999.
- 6) Padden, Carol. “Learning to Fingerspell Twice: Young Signing Children’s Acquisition of Fingerspelling,” Advances in the Sign Language Development of Deaf Children, pp.189-201, Oxford University Press, U.S., 2005.
- 7) Baker, Sharon. “The Importance of Fingerspelling for Reading,” Visual Language and Visual Learning Science of Learning Center, Gallaudet University, U.S., 2010,
- 8) 森田伸子：文字の経験， pp.202-203， 勁草書房， 東京， 2005.
- 9) 森田伸子、同上， p.186.
- 10) 森田伸子、同上， p.187.

(受理 平成 25 年 3 月 19 日)